The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	加速と占拠 : ポール・ヴィリリオ『民衆防衛とエコロジー闘争』から見るメディア政治
Author(s)	小泉, 空
Citation	共生学ジャーナル. 2019, 3, p. 54-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72884
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

加速と占拠

―ポール・ヴィリリオ『民衆防衛とエコロジー闘争』から見るメディア政治―

小泉 空*

Acceleration and Occupation

On Today's Significance of Paul Virilio *Popular Defense and Ecological Struggle*

Sora KOIZUMI

論文要旨

本稿の目的は、フランスの思想家、ポール・ヴィリリオの 1978 年の著作、『民衆防衛とエコロジー闘争』をとりあげ、2011 年の「ウォール街を占拠せよ」を経た今日、この著作が持つ意義を検討することである。ヴィリリオはこの著作の中で、スペイン独立戦争やベトナム戦争でのゲリラ戦を分析し、それを積極的なものとしてとらえながらも、ゲリラ戦を行うのは今日では非常に困難であると結論づけた。だが、彼はメディア政治を、ゲリラ戦の限界を乗り越えた先にあるものとして考えてもいた。そして、メディア政治をゲリラ戦の乗り越えとして考えると、この著作が「ウォール街を占拠せよ」にまでつながる問題を示唆していると考えることができるのである。

キーワード　ポール・ヴィリリオ、ウォール街を占拠せよ、ゲリラ、パリ・コミューン

Abstract

The purpose of research is considering the speed theory and the occupy theory of Paul Virilio's book, *Popular Defense and Ecological Struggle* (1978). In this book, Virilio discusses about the problem of confrontations between acceleration and occupy in the political movements at the time (for example, guerrilla, Japanese Red Army). On the one hand, he praised guerrilla of South Vietnamese force (Front national de libération du Sud-Viêt Nam) that had characteristics of the attachment to its territories and considered it as a kind of occupy movement. On the other hand, he criticized terrorism of Popular Front for the Liberation of Palestine and Japanese Red Army that had characteristic of using media as a tool for demonstration and considered it as accelerative struggle and as opposed to

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士後期課程；sorakoizumi429@gmail.com

guerrilla. This problem of confrontation between guerrilla and terrorism also concerns with the political movements after the global justice movement, because these movements occupy a certain of space, at the same time, actively using media as a tool for communication and expansion of them. This research argues that Virilio anticipated media politics of current political movements. Although his anticipation was pessimistic, his 70s thought is useful for grasping characteristics of media politics.

Keywords: Paul Virilio, Occupy Wall Street, guerrilla, Paris Commune

１．はじめに

本稿の目的は、2011 年の「ウォール街を占拠せよ」を経てメディアと政治の関係が改めて問い直されている今日、フランスの思想家、ポール・ヴィリリオの 1978 年の著作『民衆防衛とエコロジー闘争』をとりあげ、この著作が現代のメディア政治の議論のなかでもつ意義を検討することである。

2008 年の金融危機と、それに続く不景気に苦しんだ中間層の若者たちの不満を背景として、2011 年 9 月、ニューヨークのウォール街にて発生した抗議運動「ウォール街を占拠せよ」（Occupy Wall Street、以下「オキュパイ運動」）は、アメリカ各地、あるいは日本も含めた世界各地で同時的な抗議運動を引き起こし、大きな広がりを見せた。このオキュパイ運動は、その運動スタイルにおいて、三つの特徴を持っていた。第一にオキュパイ運動には、運動を代表し、指導するような人物、あるいは党のような組織が不在であった。それゆえウォール街に集う金融エリートたちに対する不満を背景として生まれたにもかかわらず、この運動は明確な理想の未来社会への見通しや、政府にうったえるような具体的な要求のリストを欠いていた。だが、だからこそこの運動は水平主義的な、直接民主主義の形で行われ、何らかの要求を国に通す運動というよりも、多様な背景を持った人々（学生ローンに苦しむ若者だけではなく労働者も含め）が集まり、様々なワーキング・グループが経済問題だけではなくアートや教育など多様な問題を議論し合う場として機能した（グレーバー 2015:115-6）。第二にオキュパイ運動は、フェイスブックやツイッターといった SNS を通じて情報が拡散し、議論が行われた、インターネットも運動の舞台ともする運動であった（Pickerill and Krinsky 2012:284-285）。

そしてオキュパイ運動の第三の特徴は、その名の通り、具体的に空間を「占拠」したことであった。例えばウォール街近くのズコッティ公園は運動参加者らによって占拠され、具体的な活動の場としても、またメディア上でのシンボルとしても運動の本拠地となったのである。このオキュパイ運動の「占拠」について、活動家アンジェラ・デイヴィスは、2011 年 10 月 30 日に行われたワシントンスクエアパークでのスピーチにて次のように語っている。

> 「ウォール街を占拠せよ」と口にするとき、米国が、ジェノサイド（大量殺戮）を行って先住民の土地を占拠し、建国されたことを頭に入れておかなければなりません。「ウォール街を占拠せよ」とか「ワシントンスクエアを占拠せよ」と言うとき、ほかの国では、占拠とは、暴力的で残忍なものであることを承知していなければなりません。パレスチナは占領地であり、私たちは、軍事的占拠に対して「ノー」を突きつける方法を学ばなければなりません。それと同時に、私たちは、「占拠」の意味合いも変えています。「占拠」を、何か素晴らしいもの、コミュニティに団結をもたらすものにしています。愛と幸せ、希望を呼び求めるものに。（デイヴィス 2012:97）

オキュパイ運動の占拠には、明らかに軍事的含意がある。この軍事的含意については、デイヴィス以外にも多くの論者が指摘している（グレーバー 2015:59; ディーン 2012:59; Mitchel 2012:12）。デイヴィスに習えば、オキュパイ運動は、植民地主義的な占拠とは別の形での占拠、国家の軍事的手段とは別の軍事的手段を用いたと言える。さらに、オキュパイ運動がとった占拠という戦術を軍事的観点から考察すると、よりその戦術の歴史的連続性が明らかになってくるのである。

オキュパイ運動の占拠を軍事的観点から考察した研究としては、政治哲学者ベンジャミン・ノイズの War on time: Occupy, communization and the military question と、メディアと政治の関係を研究しているジェイソン・M・アダムズの *Occupy time: Technoculture, immediacy and resisatance after Occupy Wall Street* が挙げられる。ノイズとアダムズの研究に共通するのは、オキュパイ運動の占拠を分析する際の理論的枠組みとして、ポール・ヴィリリオの占拠論を、とりわけ 1978 年の著作『民衆防衛とエコロジー闘争』を用いていることである。ヴィリリオは、この著作において、70 年代当時のベトナム戦争でのゲリラ戦をとりあげながら、このゲリラ戦の歴史的系譜をひもとく作業を行っている。後に述べていくように、ヴィリリオにとってベトナム戦争のゲリラ戦は、ハイテク兵器で武装した米軍にたいして、農民を中心とするアマチュア兵士（パルチザン）が粘り強くその土地を防御しようとした戦いであるという点において、毛沢東の持久戦論、スペイン独立戦争での史上初のゲリラ戦にもつながる実践的・理論的深みをもったものであった。そしてノイズとアダムズは、このヴィリリオのゲリラ戦論を用いて、オキュ

パイ運動の実践的・理論的深みも明らかにしようとしている。例えば 2011 年 12 月 3 日、ポートランド、シマンスキ公園を占拠した人々は、より効果的、長期的に空間を占拠するために、警察との直接対決を避け、一時的に都市の中へ消え、警察が去った後に再び公園を占拠するという戦術をとった。この戦術はまさに、慣れ親しんだ環境の中に身を隠し、逃走を繰り返しながら敵を疲弊させるゲリラ戦の戦術と比較できるものである（Adams 2014:75-76）。ヴィリリオの言葉を借りれば、ゲリラ戦とは「どこにも固体に凝縮することのない」集団による「身体なき抵抗」なのであり（Virilio 1978:49）、オキュパイ運動も都市の中で一種のゲリラ戦を行ったと言えるだろう。

だがノイズは、ヴィリリオの占拠論のアクチュアリティを認める一方で、この占拠論を先述したオキュパイ運動の第二の特徴と対置させてもいる。つまりオキュパイ運動とはメディアを積極的に活用したところにその革命性があり、「その場にいない」、匿名の参加者たちによる、空間という狭い枠組みを超えた「脱領土的な」、世界同時多発的な革命であったことを強調する見方である。ノイズはこうしたメディアを通じた運動の横断性、即時性、いいかえれば運動の「加速」にたいして、ヴィリリオを通じたオキュパイ運動の分析、つまり占拠という空間的側面を強調した分析を対置する（Noys 2013:83）。またアダムズも、ヴィリリオの占拠論を「減速主義」とよび、それをメディアのリアルタイムの速度と対置させ、それが個々の局地的な戦術的レベルにとどまっていることを批判する（Adams 2014:78）。そしてメディアを通じて、局地的で個々ばらばらの闘争をまとめあげるより抽象的かつ全般的な戦略的方向性を作り上げ、減速主義を補完せねばならないと主張するのである（Adams 2014:96-99）。

オキュパイ運動にヴィリリオの議論を重ね合わせる意義はここにある。オキュパイ運動（そしてポスト・オキュパイの思想）は「加速」と「占拠」という（ときに矛盾する）二つの要素を問題にしたのであり、ノイズとアダムズによれば、この二つの要素の対立こそが、『民衆防衛とエコロジー闘争』のなかでヴィリリオが描いたものなのである[(1)]。改めてノイズとアダムズの主張をまとめると、一方でノイズは「占拠」の側に立ち、それが現代においては無力なものになってしまったことを悲観しながらも（Noys 2013:87）、オキュパイ運動の加速性を単純に肯定することには反対する（Noys 2013:83）。他方でアダムズは、前述したとおりメディアを通じたオキュパイ

運動の加速性を部分的には肯定しようとする。

だがノイズとアダムズの研究は、立場は違えど「加速」という要素とメディアを同一視している点で一致している。それゆえ彼らは、ヴィリリオがメディアの加速的側面だけでなく、メディアの「持続的な」側面も示唆していたことを取り逃しているのである。そしてノイズとアダムズに対して本稿は、「加速」と「占拠」の対立関係が、「加速」と「持続」という対立関係に形を変えて、メディア政治という舞台の上でも継続していると主張する。つまり本質的な対立は、メディアと現実の空間との対立に回収されることはなく、メディアと現実の空間という空間的ギャップを横断しているのである。

そこで本稿は、補完的にそれ以前のテキストも用いつつ、『民衆防衛とエコロジー闘争』を加速と占拠の対立図式にそって読み解く。そしてヴィリリオに即して、この対立図式がメディアと現実の空間の対立関係だけでなく、メディア「上での」政治を考える上でも有効であることを示す。第 2 章ではカーネーション革命とパリ・コミューンの例をとりあげることで、加速と占拠の対立問題を提起する。第 3 章では、加速と占拠の対立図式を、近代戦とゲリラ戦の対立図式に重ね合わせる。第 4 章では、ヴィリリオが 70 年代当時に指摘したゲリラ戦の限界と、その乗り越えとしてのメディア政治を考察する。第 5 章では、前章で考察したヴィリリオのメディア政治論が、オキュパイ運動にもつながっていることを示す。

２．カーネーション革命とパリ・コミューン

『民衆防衛とエコロジー闘争』の冒頭で、ヴィリリオはカーネーション革命を経た 1975 年のポルトガルについて言及している。戦後もファシズム政権が続き、独立運動を抑圧しながら植民地を手放さなかったポルトガルでは、1974 年、植民地の独立をみとめる和平派の軍人や長引く植民地戦争に疲弊する若い将校たちの不満を背景として、「カーネーション革命」が勃発した。このカーネーション革命は、ファシズム政権を倒し、ポルトガルを民主化へ導いた革命であり、同時に、共産党が軍部と連携しながら大きく影響力を拡大した革命でもあった（金七 1996）。だがヴィリリオは、ポルトガル

の状況を次のように批判をしている。

> 1975 年のポルトガルにおいて、反革命となったのは革命モデルの再生産におわった革命そのものだった。軍人となった活動家たちのこの理論的作業の欠如は、彼らを収集家のごとき身振りで、今一度レーニンやトロツキーの実践的経験を、さらに前のロセルやクリュズレ将軍の実践的経験を再び現代化するよう追いやったのである。（Virilio 1978:13）

ロセルやクリュズレ将軍は、1871 年のパリ・コミューンで活躍した軍人たちであった。ヴィリリオはここでパリ・コミューン、レーニン、トロツキー、カーネーション革命をまとめて批判しているのだろうか。だがヴィリリオは別の場所で、自分はコミュニストではないと前置きした上で、パリ・コミューンに対するシンパシーを表明している（Virilio 1975:64; Armitage 1999:28-29）。それゆえヴィリリオはここで、コミューンそのものよりもレーニンやトロツキーによるコミューン解釈を批判しているのであり、カーネーション革命とパリ・コミューンの間に、レーニンやトロツキーの思想が介在していると指摘し、カーネーション革命がレーニン、トロツキーの思想の再生産に終わっていることを批判しているのである。

ではまずパリ・コミューンとはいかなる革命であったかを確認し、次にトロツキー、レーニンがパリ・コミューンについていかなる考えをもっていたかを検討していこう。1870 年、普仏戦争でプロシアに敗北を重ねたフランスでは、帝政が崩壊し、ブルジョワ共和派を中心とする国防政府が樹立された。しかし、ブルジョワジーとパリ民衆は、新しい共和制を地主やブルジョワジーを中心とする共和制にするか労働者を中心とした社会主義的共和制にするかをめぐって、さらにパリがプロシア軍に包囲される中、和平工作を進めるか徹底抗戦を行うかをめぐって、対立を深めていった。そして 1871 年 3 月、パリの民衆は蜂起し、まさにパリを「占拠」することでコミューン政府が樹立され、ティエール率いる国防政府はヴェルサイユに逃亡することとなった（長谷川 1991）。

クリスティン・ロスが強調するように、このとき「反乱者たちは来たるべき社会の青写真を何も共有していなかった」（Ross 2015:11）。パリ・コミューンは綱領や計画を欠いた（それゆえ指導的組織を欠いた）、即興的な集団

実験だったのであり、また「占拠」という戦術をとったことも含めて、オキュパイ運動と比較できるものなのである（Ross 2015:2）。確かに一方では、コミューンには市役所を中心とした間接民主主義の政治があった。だが他方でインターナショナルや20区中央委員会、国民衛兵中央委員会、諸々のクラブといった諸自治集団による自由な団結という別の形での政治がそこにはあったのである（Ross 2015:19）。とりわけコミューンは教育の面で、無料の非宗教的な公教育を後の第三共和制にさきがけて実現しようとし、12歳以上の男子のための初の職業学校、後の保育園のさきがけとも言える託児所を計画するなど、集団的実験のなかで目覚ましい想像力を発揮した（Ross 2015:40-41）。

だがこうした画期的な試みが行われている間、ヴェルサイユに逃亡した政府は、軍隊を組織し、外部からコミューンを破壊しようと企んでいた。ここにトロツキーは、コミューン失敗の原因を見いだすのである。トロツキーは国民衛兵中央委員会が一時的に軍事独裁をしき、即座にヴェルサイユに追い打ちをかけずに、パリを占拠して、防御的姿勢にとどまったことを批判するのである。

> 実際のところ、かれらの感傷的な人間味は、革命的消極性の裏返しにすぎなかった。運命の意思によってパリの権力を委ねられたひとびとは、この権力を即座に、徹底的に利用し、ティエールに追い打ちをかけ、息抜きの暇をあたえずに叩き潰し、軍隊を自分たちの手にしっかりと握り、将校団の必要不可欠な粛清をおこない、地方を奪取する必要性を理解することができなかった。（トロツキー 1962:112）

ここには加速と占拠の対立が存在する。トロツキーはコミューンの失敗の原因を、その消極性、パリでの待機—持続のうちに見いだす。そして、一時的な緊急手段として「もっと軍事的な、いいかえれば、もっと峻厳な体制を確立」（トロツキー 1962:116）して、パリという空間を離れ、攻撃的に、「即座に」、つまり加速的に権力（＝国家）をとることを肯定するのである。同様にレーニンも、『国家と革命』において、コミューンの成功のためには、一時的な軍事権力を用いるべきだという結論に達している。レーニンも、コミューンが自らの軍事力を「十分自由に行使しなかったこと」（レーニン

1957:90）を非難するのである。

こうしたトロツキー、レーニンの反省は、結果的に先述したコミューンの集団実践とは真逆の組織形態を肯定するだろう。コミューンはあまりに準備不足で、綱領も曖昧であり、指導者間の統一も欠如していたがゆえに失敗したのであり、一時的にでも峻厳な軍事体制を、「中央集権化された正確な指導機関」を設置しなければならないということになる（トロツキー 1962: 127）。確かに、ヴェルサイユの政府軍の襲撃に対し、コミューンの兵力はまったく有効に組織されることなく、計画も集団的な規律も一切欠いていた。「二十日間も三十日間も同じ大隊が築城陣地で守備に当たっているかと思うと、外の大隊は予備として無為に暮らしているありさまである。大隊の戦闘員も不足で、個々の衛兵が、気が向いたらやってきて、戦闘に従事し、また立ち去ってゆくといった具合だった。」（淡 1971:181-182）こうした状況に業を煮やして、ヴィリリオが批判したクリュズレ将軍は、1871 年 4 月 5 日以降、国民衛兵総司令官となり、公然と軍事的イニシアティヴをとりはじめることとなる（長谷川 1991:101-104）。だがトロツキー的な見方で言えば軍事体制はあまりに遅すぎたのであり、結果、コミューンは敗北することとなる。

それではコミューンはその宝を守るために、一時的であれ軍事体制を敷くべきだったのだろうか。目的のためには、一時的であれ理想とする社会とは矛盾する手段を用いるべきだったのであろうか。1975 年のカーネーション革命の末路を見たヴィリリオは否と答える。ポルトガルの民主化は軍のクーデタを通じて達成され、共産党は軍と関係を深めることでその勢力を伸ばそうとした。軍は制憲議会選挙が行われるまでのあいだだけ一時的に実権を握り、選挙が終わればその権力を議会に譲り渡すはずであった。しかし、75 年 4 月の総選挙では穏健派の社会党が勝利したにもかかわらず、左派軍人たちによる革命評議会は、向こう 3 年ないし 5 年は同評議会が全権を保持する旨の「軍政同意書」を主要政党から強引に取り付け、強権的な社会主義体制を維持しようとしたのである（金七 1996）。1977 年の『速度と政治』でヴィリリオが述べるように、カーネーション革命はレーニン以降の党主導の革命が本質的に軍事的なものであることを明らかにしたのであり、それどころかカーネーション革命において共産党は軍を革命の手段にするどころか、左派軍人のパートナーでさえなく、実権を握る軍のご機嫌取りで

しかなかったのである（Virilio 1977:100-102）。

ゆえにヴィリリオは、トロツキーやレーニンとは反対にパリ・コミューンの戦術を肯定する。つまりコミューンの規律もなく、計画性もない戦術を、たとえそれが 1871 年には失敗に終わったとしても肯定するのである。なぜならヴィリリオにとって、この戦術は、コミューンに始まったものでも、コミューンに終わったものではないからである。

３．加速する戦争と減速する戦争

パリ・コミューンの解釈をめぐって、加速と占拠という二つの路線が導き出された。一方は、よりよい「未来」のために、一時的であれ軍事的手段を用いてすぐさま権力をとることを称揚する。他方は、何ら未来の青写真を持たないが、「いま、ここに」、つまり占拠された空間内にとどまって、理想の世界を作り出そうとする。この対立図式は、1975 年の『ブンカー・アルケオロジー』のなかにも見いだすことができる。ここでヴィリリオは、近代戦争と原始的な戦争との対立、あるいは西洋の戦闘と東洋の戦争との対立を、加速する戦争と待機する戦争の対立として描いている。

> 西洋では戦争の時間は消滅することを目指す。ここに核の現状の意味を説明するものがある。しかし西洋の軍事制度はいまだ孤立したものではない。もう一つの思考が現代の戦争機関のすぐ近くで存続しているのであり、時代遅れな思想と原始的な戦闘が続いているのである。私たちは軍隊の最新の進化を分析するとき、あちらこちらで生き残っている古代の軍事思想と現代の軍事制度を支配するシステマティックな知性とのあいだのこの二重性を、たいてい見落としてしまっているのである。（Virilio 2008:31）

ヴィリリオはこの二重性を、「技術者や科学者によって（空間、時間を）《縮められた》戦争」と「農民による《延長された》戦争」の対立に言い換えている（Virilio 2008:26）。つまり一方には、加速する近代戦争があり、他方には、減速する原始的な戦争があるのである。

ではまず「原始的な」戦争とはいかなるものだったのか。ヴィリリオが仮

想する起源において戦争は、「その場の」怒りにまかせた喧嘩以上のものではなく、「前もって」の戦争の準備はなかったという。人々は衝動的かつ瞬間的に殴り合ったかと思えば、ゲリラのようにすぐに環境の中に身を隠し、姿を消していき、「暴力行為は、孤立して生きる人間、または民族集団単位の人間が自分たちの環境のなかで自分たちの存在を見せず、目立たなくすること以上に進むことはなかった」。従ってそこには前もって準備された暴力の「シナリオ」、集団をまとめ上げる「戦争の指揮」なるものは存在しなかったのである（Virilio 1978:15-16）。ヴィリリオによれば、こうした原始的戦争には近代以前の農民一揆なども含まれ、その武器は、「道具や環境の日常的使用からの逸脱」を超えるものではなかった（例えば落とし穴、鎌や狩猟道具）（Virilio 1978:52）。

だがヴィリリオは、戦争行為にはもう一つの系譜があることを示唆する。ヴィリリオはこの系譜を、「軍事的知性」による戦争行為と定義する。この軍事的知性は、何のシナリオも戦略も持たない暴力、オキュパイ運動やパリ・コミューンのように「来たるべき社会の青写真」をもたない暴力に対立するものなのである。

> ゆえにその起源から軍事的知性が戦うであろうものとは、この不完全にしか定義されていない自由と偶然と不確実性の総体、自然環境とそこから生み出される自然発生的な運動というカオスなのである。つまり時間と空間の中に戦争の概念の一貫性を、戦争の指揮可能性を確立することが、軍事的知性の第一の定義なのである。（Virilio 1978:16）

ではばらばらで偶発的な暴力に対して、いかに戦略やシナリオがもたらされることとなるのか。ヴィリリオは、古代においては丘に建てられた要塞や高々と建てられた見張り台こそが軍事的知性をもたらしたと主張する。こうした戦争インフラは、直接的戦闘以前に敵の情報をもたらし、敵の動きをシミュレートし、「予見」して、いくつかの選択肢をたてることを可能にするものだったとヴィリリオは主張する（Virilio 1978:16-17）。古代の軍人は高所に昇り、自然環境から身を引き離し、周囲を抽象化する特権的な視点を手に入れることで、その場その場の衝動的なレベルとは別のレベルに暴力を移した。見張り台というテクノロジーは、組織されることない個々ばらばら

の暴力を俯瞰し、それらを接合させ、まとめ上げていくことで、抽象的な戦略的目標を可能にするのである。この視覚機能の拡大は、丘や見張り台からはじまり、主権国家成立以後の国土の詳細な地図の作成、そして人工衛星による電子地図にまで至るだろう。ヴィリリオにとって、この予見、見ることこそが、物理的破壊以上に軍事的テクノロジーの本質であり（Virilio 2008:25）、「加速」の要求とは、なによりもまずこの予見と結びついているのである。「支配することとはもはや予測する以外のものでは決してなく、より速く進むこと、先を見ることなのである」（Virilio 1978:83）。トロツキーがパリ・コミューンの失敗から敵の動きをシミュレートし、息抜きの暇を与えず権力をとることを主張したように、軍事的知性は、対応の速さ、それを可能にする情報の速さ（メディアを介した知覚）に大きく依拠している（例えば地対空ミサイルシステム）（Virilio 1978:17-18）。そして、ヴィリリオにとってこの速度の論理こそが、西洋の近代戦争を駆動させてきたのである。

> しかしながら、産業革命以来私たちは何に気づいただろうか。《戦争の時間》の期間の削減である。西洋の軍隊のあらゆるエネルギーは、敵に対する全面的かつ迅速な勝利を目指すのである。国民の戦争とともに、ヨーロッパにおいて明らかにますます進行する紛争の短縮が目撃された。数年（1870、1914、1940）から数日（1967、1973 年の近東）へ、そして最終的には限定核戦争の潜在的可能性によって、紛争の時間は数時間となるのである。（Virilio 2018:30-31）

実際、易々と国境を越えるミサイルの速度に身体が反応することは不可能であり、身を守るためにはレーダーや人工衛星などのメディアを介して、敵の攻撃以上の速度を要求するほかない。こうした速度の論理のもとでは、敵対する諸国家は、優位を得るためにさらなる速度を求め続けるだろう。

しかし、ヴィリリオの言うように、必ずしも戦争は、こうした速度の論理だけで駆動しているわけではない。加速する近代戦争の傍らで、常に原始的な戦争が生き延びているのである。近代戦争の出現以後、新たに復活する原始的な戦争は、「ゲリラ戦」、「持久戦」と呼ばれることとなる。つまり原始的な戦争は、加速する戦争に対抗するために「減速する」戦争として復活するのである。ヴィリリオはこの二つの戦争の対立は、スペイン独立戦争での

ナポレオン率いるフランス軍とスペイン民衆のゲリラ闘争に見いだされると述べる。

> 最初の《近代》戦争とはナポレオン帝国の戦争である。同時代の歴史の中で初めて、大衆と財力が戦争に利用されたのである。……しかしこの巨大な勝ち誇った軍隊は、スペインで重大な失敗を被った。この失敗はもっとも前兆にすぎない。大衆と全体主義の力は、古代の方法、農民の戦闘方法の前には無力である。そこから続く歴史に目をやれば、近代的軍隊の破壊力の指数的増大にもかかわらず、この最初の失敗の恒常的な周期性、繰り返しが目撃されるだろう。ベトナムの長期的戦争が、まさにこの最近の例なのである。(Virilio 2008:31-32)

一方のナポレオンは、軍事費をブルジョワから引き出し、他方で主に貧しい労働者階級を兵士として動員しながら、機動力に特化した国民軍を作り上げた。『速度と政治』でヴィリリオが述べるように、ナポレオン軍は、ブルジョワジーと軍事階級の癒着の産物であり、同時にプロレタリアートの襲撃力を資本化して、巨大な軍隊を作り上げたのである(Virilio 1976:37-38)。そして 1808 年、ナポレオンは、イギリスの軍事侵入に対する軍事同盟という名目で、スペインにフランス軍を駐屯させ、事実上、スペインを支配下に置いた。だが住民とフランス軍との軋轢は深まり、スペイン独立戦争が始まることとなったのである。

この戦争ははじめ、スペイン軍とフランス軍との戦いであった。しかし、ナポレオンが本格的にスペイン侵略に乗り出すと、スペイン軍の防衛戦は破壊され、正規兵はスペイン各地に逃走し、ばらばらに散らばっていくこととなった。しかし、「一見」敗北したかに見えた各地に散らばったスペイン正規兵たちは、住民と合流し、中央の戦略的指揮系統もないまま各々で徒党を組んで戦い始めたのである。こうした危機的状況の中で、スペインの人民戦争は原始的な戦争に回帰することとなる。スペインの戦闘員は分散し、自分たちの領土の地形の利を活かして環境の中に身を隠し、住民から補給を受けつつ不意に現れ、執拗に攻撃するという戦術を繰り返した。地形の利を活かしたこの地域的な闘争は、より脱中央集権化した各人の自由度の高い闘争スタイルを生み出したのである（クラウゼヴィッツ 1965:159)。こうしてフランス軍は、不慣れな環境とこうした「どこにも固体に凝縮することの

ない」戦術に囲まれて次第に疲弊していき、最終的に初の敗北を被ることとなった（立岩 1984）。

> 実際、スペインの民衆はもはや空間の主人ではなかったにしても、まだ時間の主人ではあった。スペインの戦闘員の速度と移動能力は、自分で機会を選択し、どんな戦闘にも追い詰められることなく執拗に攻撃し、不意に襲い、最終的にナポレオンの軍隊に、《巨大な自動機械》に打ち勝つことを可能にした。ナポレオンの軍隊は、無愛想な土地の中で兵站が滞っていき、その速度を緩められることとなったのである。（Virilio 1978:49-50）

このスペイン民衆の延長された戦争は、ゲリラ戦と名付けられ、クラウゼヴィッツの『戦争論』での分析、毛沢東の持久戦論を経て、ベトナム戦争のゲリラ戦に受け継がれていくこととなる（Virilio 2008:32）。ヴィリリオ同様、クラウゼヴィッツも、戦争が延長されることで生み出される時間は、不慣れな土地で活動せざるをえない侵攻者を疲弊させ、自らの土地で敵を待ち受ける防御者側に有利に働くと主張する（クラウゼヴィッツ 1965:262）。毛沢東もまた、敵があまりにも強大でこちらがまだあまりに弱小なときに、革命戦争の「持久性」を理解せず、急速な勝利のために敵の中心めがけてまっすぐ突っ込んでいくことは、「革命的セッカチ病」「捨てばち主義」であると批判する（毛 1957:256）。そしてヴィリリオは、ベトナム戦争でベトナムを勝利に導いたのも、この持久性だと考える。南ベトナム民族解放戦線野のゲリラは、カモフラージュのために竹を用いて建築を作るなど環境利用闘法を行いつつ、空爆を耐え、敵が来るのを待ち受けるために巨大な地下トンネル網を作り出した。そして彼らは、逃走と奇襲をしつこく繰り返すことでアメリカ軍を疲弊させていった（吉澤 1999:193-194）。「そこでは住民は英雄的精神よりも時間のかかる日常的な創意工夫、鈍重な我慢強さを発揮せねばならなかったのである。」（Virilio 1978:50）

このように、ヴィリリオにとって、近代戦争の発明以後、加速する戦争と減速する戦争の対立が常に続いてきた。もちろんこれはあくまで理念的な区別である[(2)]。ゲリラは近代的な武器でも武装しており、ゲリラ戦は常に党主導の戦略や、敵国の混乱を狙う利害関係のある第三者国家の思惑とも結びつき、最終的な機動戦、権力をとるための「決戦」と共存する。ベトナ

ム戦争を最終的に決着させたのも、北ベトナムの正規軍による戦車を用いた突撃であった（Virilio 1978:50-51）。また瞬間的な破壊への恐怖からもたらされる核抑止は、持久戦からその引き延ばし戦略を生み出したといえ（Virilio 2008:32-33）、現代もゲリラ戦が続いているとしても、ゲリラ戦が常に被抑圧者側や革命側の専売特許ではないことは確かだろう。実際、クラウゼヴィッツや毛沢東においてもこの二つの戦争は混合しており、概してゲリラ戦は最終的には決戦へと向かう革命の発展段階の初期段階、権力奪取のための基板として位置づけられ、あるいは原始的な東洋の闘争は、最終的には現代的戦争に結実する軍事史の発展過程のなかに位置づけられるだろう（Adams 2002:70）。

だがヴィリリオは、現実の戦争でいかに加速する戦争と減速する戦争が混在しているとしても、二つの戦争の理念的区別は手放してはならないと主張する（Virilio 2008:34）。時間的、歴史的な発展段階の違いだと考えられ、現実には混在している二つの戦争のあいだに、あえて境界線を引こうとしたところにヴィリリオの軍事思想の核心があるのであり、これこそが彼の思想の緊張感を保っているのである。ヴィリリオにとって二つの戦争の差異は非歴史的であり、相反する二つの理念的極として常に存在しつづけている。

４．ゲリラ戦の困難—土着闘争からメディア政治へ

しかしながら、ヴィリリオは『民衆防衛とエコロジー闘争』のなかですでに、原始的な持久戦を今日行うのは非常に困難だと考えていた。その理由はまず、先述したように、ベトナム戦争が結局は大規模な機動戦で終わったからであった。第二に、当時のパレスチナの人々の状況が、原始的な持久戦が今日もはや不可能であることを証明しているように見えたからである。ヴィリリオは次のように述べる。

> パレスチナのケースは、国民の未来の性格を先取りしている。ゆえに私たちはパレスチナの人々とともに、次なる段階、救貧院やナチの強制収容所が予見していた段階にいるのである。自分の土地から乱暴に引き離され、収容所のトラ

> ンジットに投げ込まれ、国民全体が完全に動産になったのである。その推進者にとって、パレスチナ民衆の防御は、国民の脱局地化、空間的分裂症に対する反省以外のものではあり得ない。この空間的分裂症はまもなく、永遠の移民による時間の分裂症に取って代わられるだろう。ここに前代未聞の生存形式を見いださなくてはならない。なぜならダマスカスやベイルートで、パレスチナの人々が場の獲得に続けざまに失敗するのをみるとき、土地は闘争や戦闘の賭け金そのものとなり、法的土地や政治的領土は完全に消滅しているからである。この戦闘は、生活環境の境界を守るためのものではなく、いつかどこかにその輪郭を描くためのものなのである。敵はどこにいるのか。敵は誰なのか。パレスチナの人々にとって、敵はナショナルなものではなく、世界化している のである。（Virilio 1978:54）

スペイン独立戦争やベトナム戦争では、ゲリラたちは自分たちの領土の境界を侵害されても、ジャングルや茂みに身を隠すことで、まだかろうじて領土にしがみつくことができた。しかしパレスチナの場合、守るべき土地は最初からあるのではなく、獲得すべき闘争の目的そのものとなったのである。では土地を奪われたパレスチナの人々は、当時いかなる戦争を行ったのか。1968 年、パレスチナ解放人民戦線は、イスラエルのエルアル航空がもつボーイング 707 型機をハイジャックした。この「テロリズム」は何らかの物理的目標ではなく、「世界」へ向けて、パレスチナ問題を訴えかけるために行われるのである（酒井 2016:152-153）。

> その地理学的消滅の後、彼らの最後の目標は、パレスチナの人々が地図から消滅したように記憶からも消滅しないようにすることだった。もし彼らが移民として、法的に大地の住民であるのをやめたとしても、彼らはまだ特殊な領土は所有している。つまりメディアという領土である。空路から鉄道まで、道路から新聞、テレビまで、これらの最後のアドヴァンテージを彼らは失ってはならないのであり、もはや媒介は中立であってはならないのである。（Virilio 1978:55）

ここに土着の原始的戦争からメディア政治への移行が見いだされる。そして『民衆防衛とエコロジー闘争』の先行研究は、総じてここにヴィリリオの絶望と限界を読み取ってきた（酒井 2016:169; Noys 2013:85; Adams 2014:21-

22)。だがノイズやアダムズは、ヴィリリオがここで（おそらく彼自身が意識しない形で)、メディアの二つの機能を示唆していることを見逃している。一方で、ヴィリリオにとってメディアは、見張り台や人工衛星同様、加速の戦争の論理に与する側面を持つ。ヴィリリオによれば、情報メディアは情報を瞬時に拡散させ、そこから何らかの重みを奪い、消え去りやすくさせてしまう。情報メディアの速度は、受け手に時間のかかる反省を促すと言うよりは、受け手を反射的に、過度に行動主義的にすることで、全体主義的な組織化に与するものなのである（Virilio 1977:15)。「同時性」という特性を強調した場合のメディアがこれであり、それは政治的な問題を一種の見世物にしてしまうだろう。

だが他方で、上の引用が示すように、ヴィリリオにとってメディアは、「記憶」という機能をもつ。つまり土地を失ってもなお記憶のなか、出来事を複製し、再生するメディアのなかで、闘争は持続しうるのである。加速する戦争テクノロジーによって、手早く抹消されないために、世界の人々の記憶に残ろうとすること。この場合、メディアは減速の戦争の論理に与することになり、メディア政治を持久戦との断絶ではなく、その延長としてとらえられるようになる。

確かにヴィリリオにとってメディア政治は、暴力的な土地の収奪という悲劇から苦し紛れに生み出されたものであり、そこに何らかのポジティブな理由付けを見いだすことはできない。ヴィリリオにとってメディアという領土は、実際の領土に比して、闘争の持続性を担保するためにはあまりに心許ないものだからである。日本の赤軍も自らの姿をフィルムに記録したが、それは自分たちの軍事的直接行動の性急さが、いずれ自滅に向かうことを悟った上での束の間の領土に過ぎなかった（Virilio 1977:16)。しかし、ネガティブな形であれ、ヴィリリオがメディア政治を持久戦の延長でとらえる可能性を示したことは、『民衆防衛とエコロジー闘争』の今日的意義を考える上で重要である。占拠だけでなく、メディア政治も明らかに軍事的含意を持っているのである。そして、オキュパイ運動は、テロリズムとは別の形で、メディア政治の可能性を示したと言えるのである。

５．再びオキュパイ運動へ

再びオキュパイ運動に戻ろう。1999 年の WTO 総会反対デモのような反グローバル運動からイラク戦争反対運動、2011 年のオキュパイ運動まで、近年の大規模な抵抗運動は総じて（その主張は違えど）、占拠という闘争スタイルに回帰した[(3)]。どれだけ時勢に合っていないように見えても、原始的な戦闘は生き延び続けている。まずこのことが重要である。しかし当然過去と現在の違いもある。近年の抵抗運動の根拠地は、守るべき故郷、土着の大地などではなく、あくまで闘争の中で事後的に獲得された空間でしかない（Noys 2013:85）。例えばオキュパイ運動は、その始まりはまずネット上での占拠の呼びかけ、情報の拡散から始まった。土地を剥奪されメディアの領土へと移動したパレスチナ解放人民戦線とは反対に、オキュパイ運動はメディアの領土から現実の領土へと移動した運動と言えるのである（伊藤 2012:55）。そして先述したように、オキュパイ運動は占拠後も、リアルな場にとどまりながら、同時にインターネットという電子メディアを領土とした。さらに、最初の占拠の場であるズコッティ公園の占拠者が立ち退かされた「後」も、メディア上での議論と呼びかけは継続し、アメリカ各地に占拠の実践を拡散させたのである（五野井 2012:56-60）。実際、オキュパイ運動は加速の戦争の極と減速の戦争の極の「あいだ」、二つの戦争の絡み合いの中にいるかのようである。それはその場にいないものたちへ、「世界」に向けて、自らの姿を SNS で拡散させながらも、占拠というかたちでトポロジックな闘争に執着した。それはメディアを通じて世界同時的につながりながらも、巨大な中央集権組織を作ることがなかった[(4)]。

あるとき占拠地が失われようとも、具体的な空間が失われようとも、メディアのなかで戦争は持続し続ける。持久戦は空間を喪失しても、時間の中で続きうるのである。ゲリラ戦自体が正規軍の「敗北」の結果、その「代用」として生み出された物であるように（銃がなければ鎌を、要塞がなければ落とし穴を）、原始の戦争は「手段を変えた戦争の継続」として、記憶という領土の上でも続いていく。オキュパイ運動がメディアという領土を通じて同様の実践を世界各地に生み出したように、メディアという領土も含みこんだ持久戦は、「ここ」がだめでも別の場所に闘争の継続を託すことができ

るのである。

さらに持久戦を空間だけでなく、一定の時間スパンをも超えて継続するものとも考えるべきではないだろうか。実際、持久戦の本質とは、戦争の時間を延長し、粘り強く戦うことで戦争の終わり—つまり勝ち負けを曖昧にするところにある。確かに出来事を 1871 年 3 月 18 日 から 1871 年 5 月 28 日（パリ・コミューン）といった形で、一定のスパンに押し込めれば、闘争の勝敗をはかることは可能であろう。だがヴィリリオが示したように、時間をもっとさかのぼれば、こうした事態は何度も反復され、それでも素朴な闘争が続いてきたことがわかる。アダムズも指摘するように、反グローバル運動からオキュパイ運動まで、近年の占拠という形をとった運動は、近代戦争の趨勢と並行するかのように、その個々の持続スパンがますます短くなっている。これは一見占拠の無力さを証明しているかのようである。だが同時に出来事と出来事のあいだの間隔も短くなっており、運動の解散と継続の境目はますます曖昧なものとなっているのである（Adams 2014:38）。ゆえにオキュパイ運動が早々につぶされたからと言って、その無力さを嘆くのは性急であるし [5]、メディア上で続いた闘争が再び空間占拠という形で浮上することもあり得るのである。

注

(1) また『民衆防衛とエコロジー闘争』を取り上げた研究としては、同じくジェイソン・アダムズの 2002 年の修士論文、Popular defense in the empire of the speed: Paul Virilio and the phenemenolgy of the political body や酒井隆史『暴力の哲学』が挙げられる。両研究はヴィリリオのゲリラ論をパリ・コミューンや 68 年と関連するものとして、さらにそれが党の軍事化に対する批判であったと考えている点で、本稿と共通する。だがアダムズはヴィリリオの抵抗論の射程を、テクノロジーの民主的管理にまで広げているが（Adams 2002:7-8）（彼のネット賛美もここに由来するように思われる）、民主的管理論にはむしろ慎重であるべきだと本稿は考える。なぜなら民主的管理論は、民主的に管理されたテクノロジーであれば何でもいいという考えに容易に至るのであり、結果、テクノロジーは中立化され（それは使い方次第で、あるいはそれを取り巻く社会的諸関係次第で、善にも悪にもなるというわけである）、手段そのものの意味を問う姿勢は抜け落

ちるからである。テクノロジーそのものに内在する権力性を問うたところにヴィリリオの持ち味があるのであって、安易に民主的管理とヴィリリオの思想を和解させるべきではない。他方酒井は、ヴィリリオのゲリラ戦論に潜む保守性と今日における限界をつき、ヴィリリオのゲリラ戦論に対してサパティスタなどの運動が持つ新しさ（ネットの活用や性差別への視点）を強調している（酒井 2016:186-187）。本稿は、ヴィリリオの限界と今日の運動の新しさを認めつつも、なおそれでも時代を超えて共通する占拠という戦術の意義について問いたい。

(2) おそらくは当時のフランスのマオイズムの影響を受け、あるいはクラストルらによる人類学の成果を（曲解的に）使い回したともいえる、このヴィリリオのゲリラ戦論は、間違いなく東洋の過剰な理想化を伴っているし、現在の人類学的知見からも批判的検討が加えられるべきであろう。そしてこれは、ヴィリリオに限らず 70 年代のフランス現代思想全体にいえる問題である。だがこの問題に答えるには、本稿とは別の論考が必要である。

(3) アントニオ・ネグリとマイケル・ハートは、ゲリラ戦から五月革命、フェミニズム運動、そしてグローバル・ジャスティス運動まで、より民主主義的な闘争スタイルの追求が一貫して続いていると指摘している。確かにこれらの運動は何ら共通したメッセージを持たないが、その闘争スタイルにおいて決戦なきゲリラ戦を追求してきたと言えるのである（ネグリ、ハート 2004:127）。

(4) カール・シュミットが見抜いていたように、ゲリラはその闘争を継続する上で、地元住民からの支援・承認だけでなく、敵の敵（スペイン独立戦争ならイギリス）からの支援・承認も欠かすことができず、常によりマクロな世界戦略の代理戦争という側面も持つことになる（シュミット 1995:160-161）。ゆえに現代も持久戦が継続するためには、直接的・物理的支援だけではなく、メディアを通じて、その場にいない誰かのまなざしをえなくてはいけない。物理的兵站だけではなく注意の兵站も考えなくてはならないのである。

(5) 哲学者ニック・スルニチェクとアレックス・ウィリアムズは、その代表と言えるだろう。彼らは、オキュパイ運動含む最近の社会運動を素朴政治（folk politics）と名付け、それらが地域的レベルにとどまる卑小で、消極的かつ防御的なものであったこと、組織がばらばらであったために何ら有効な要求や明確な戦略をうちだせなかったことにいらだつのである。

参照文献

淡 徳三郎 1971 『パリ・コミューン』東京：法政大学出版局。

デイヴィス、アンジェラ 2012 「「脱」占拠」肥田美佐子訳、『オキュパイ！ガゼット』編集部編『オキュパイ！ガゼット』p. 97、東京：岩波書店。

ディーン、ジョディ 2012 「そこに分断が存在する、不正もまた……」肥田美佐子訳、『オキュパイ！ガゼット』編集部編『オキュパイ！ガゼット』pp. 57-63、東京：岩波書店。

グレーバー、デヴィッド 2015 『デモクラシー・プロジェクト：オキュパイ運動・直接民主主義・集合的想像力』木下ちがや.江上賢一郎.原民樹訳、東京：航思社 。

五野井 郁夫 2012 『「デモ」とは何か』東京：NHK 出版。

長谷川 正安 1991 『コミューン物語』東京：日本評論社。

伊藤 昌亮 2012 『デモのメディア論:社会運動社会のゆくえ』東京：筑摩書房。

金七 七男 1996 『ポルトガル史（増補新版）』東京：彩流社。

クラウゼヴィッツ 1965 『戦争論』淡徳三郎訳、東京：徳間書店。

レーニン 1952 『国家と革命』宇高基輔訳、東京：岩波書店。

毛沢東 1957 『毛沢東選集第一巻』毛沢東選集刊行会訳、東京：三一書房。

ネグリ、アントニオ、ハート、マイケル 2004 『マルチチュード〔上〕』幾島幸子訳、東京：日本放送出版協会。

酒井 隆史 2016 『暴力の哲学』東京：河出書房新社。

シュミット、カール 1995 『パルチザンの理論：政治的なものについての中間所見』新田邦夫訳、東京：筑摩書房。

立岩 博高 1984 「炎のイベリア半島：スペイン独立戦争とウェリントン」志垣嘉夫編『世界の戦争 7：ナポレオンの戦争』pp. 149-189、東京：講談社。

トロツキー 1962 『テロリズムと共産主義：トロツキー選集第 12 巻』根岸隆夫訳、対馬忠行編、東京：現代思潮社。

吉澤 南 1999 『ベトナム戦争：民衆にとっての戦場』東京：吉川弘文館。

Adams, Jason. 2002. Popular defense in the empire of speed: Paul Virilio and the phenomenology of the political body. Burnaby: Simon Fraser University.

Adams, Jason. 2014. *Occupy Time: Technoculture, Immediacy, and Resistance after Occupy Wall Street*. New York: Palgrave macmillan.

Armitage, John. 1999. From modernism to hypermodernism and beyond: an interview with

Paul Virilio. *Theory culture and society* 16(5-6):5-6.

Mitchel, W. J. T. 2012. Image, space, revolution: the arts of occupation. *Critical Inquiry* 39(1):8-32.

Noys, Benjamin. 2013. The war of time: occupation, resistance, communization. *Identities: journal for politics , gender and culture* 10(1-2):83-92.

Pickerill, Jenny and Krinsky, John. 2012. Why does Occupy matter? *Social movement studies* 11(3-4):289-287.

Ross, Kristin. 2015. *Communal luxury: the political imaginary of the Paris Commune*. London: Verso.

Virilio, Paul. 1975. Véhiculaire. In Paul Virilio, Jacques Berque, Jean Ziegler, A. Guedez, J.-P. Corbeau, Constant, Jean Duvignaud (eds.) *Nomades et vagabonds*, pp. 41-68. Paris:Union générale d'éditions.

Virilio, Paul. 1977. *Vîtesse et politique: essai de dromologie*. Paris: Galilée.

Virilio, Paul. 1978. *Défense populaire et luttes écologique*. Paris: Galilée.

Virilio, Paul. 2008. *Bunker archéologie*. Paris: Galilée.

Williams, Alex and Srnicek, Nick. 2016. *Inventing the future： postcapitalism and a world without work*. London: Verso.